

途上国支援の現状と課題および本事業への期待 ：青年海外協力隊の立場から

(元青年海外協力隊技術専門員 前田美知子)

マレーシアにおける活動例

- ・ 24 年前、初めて協力隊員がマレーシアの農山村の幼稚園に入り、最初の約 10 年間は本当に手探りだった。要請側の意欲もどうか？というところだった。しかし 10 年たってみれば、やはり、子どものために協力隊員が懸命に幼児教育を伝えたことだけは、現場の保育者たちに分かってもらえるようになった。
- ・ ところが、そこでマレーシア経済の急発展をたどり始めた。国策として国力を増強するために、小学校のうちから学力を上げなければならない、小学生の学力に備えて幼稚園の方も識字教育、知的な教育へ力を入れなくてはならない、ということになった。そのため、協力隊が目指してきた「子どもにふさわしい教育」「子ども中心の教育」「遊びを中心とした教育」が、そぐわないということになった。そこで一応、マレーシアで幼児教育支援は終結し、マレーシアではしばらく協力隊の隊員の要請がなかった。
- ・ その後 10 年たち、地方開発省（公立の幼稚園の 80%を管轄）の指導者達が、一生懸命知的教育を推進しては来たが、幼児の発達に合わせる必要を痛切に感じて、日本の訪問ということになり、お茶の水女子大や小日向台幼稚園見学、研修も行った。その結果、子どもの発達を促す教育のために指導者が現状改善に頑張らなくてはならないという考えが持たれるようになった。やはり、過去 10 年協力隊の積み上げた地盤は、決して無駄なことではなかったと感じた。

青年海外協力隊の活動の概要

- ・ 24 年前に幼児教育に関わる派遣が始まった。私はそのときから 20 年間関わった。途上国の幼児教育支援の経過をお話したい。
- ・ 25 年、四半世紀で、ようやく少し光が見えたか、というような途上国の支援のあり方。協力隊の活動が、今までは JICA の外務省関係の仕事だったが、初めて教育レベルに乗せて話し合いができるようになったことをとてもありがたく思う。
- ・ 協力隊は 24 年間に 378 人の保育士と幼稚園教諭を派遣。派遣した数は 41 カ国。現在は 32 の国々で 60 人の隊員が派遣されている。派遣先の内訳は、アジアが 42%、中南米は 28%、アフリカが 11%。現在の 2003 年の現状では、エジプト・シリア・モンゴル・中国・ニジェールの 5 カ国に、多くの隊員が派遣されている。
- ・ エジプト・シリアは、中進国と言ったらいいか、途上国と言ったらいいか、はかりかねるところ。モンゴルは社会主義が崩壊した後、色々経済的にも教育的にも混乱があり、協力隊員をそれぞれ現場の講師という形で派遣し、実際に一緒にやっつけていこうという形の協力をしている。中国は独自のレベルの高さは持っている。日本の幼児教育に非常に

関心を持っている。現場に日本からの協力隊員を要請し、一緒に保育をやってみる。その姿を見ながら、自分たちの学べるものは学び取りたいというような姿勢でいるようだ。ニジェールは、教育省に幼児教育の指導者がいて、その人の熱意で、幼児教育を一生懸命進めようとしている。ただ現場では力がないので、日本の教材を紹介してほしい、日本人たちの保育する姿を見たい、という形で行っている。

- ・協力隊の隊員は、現場実戦経験を持つ保育者たち。2年間の任期で途上国に派遣され、途上国の幼稚園、保育所、養成校、あるいは巡回や講習といった、現場レベルで自分の保育力を生かして活動している。

協力隊員の活動

- ・隊員に求められることは、日本の幼児教育を紹介して欲しい、というのが一つ。また、途上国では指導者も少ないし養成校も少なく、幼児教育というものが知られていない。そこで現場へ入って、一緒に指導して欲しい、というような形。トップに立っているとされるようなマレーシアでも、保健衛生の面でも非常に問題があるし、保育の内容や方法も知られていない。そこで現場で一緒に実践しながら現地の保育者を指導する、という形。
- ・隊員が途上国の現場に入って一番悩むことは、自身は日本では子どもを中心とする保育を一生懸命行ってきたが、途上国に行ったとたん、大人中心の指導に直面すること。日本の方法や教育観を持って行ってそのままやろうとしても、決してできないという大きな壁にぶつかる。
- ・もう1つは言葉の壁。言葉をこなして途上国の人達と一緒に何かをできるようになるには、1年間かかると言われる。1年間終えた後に初めて、2年目で途上国の先生たちと一緒に色々な活動ができるようになるが、2年間が終わると任期満了ということで帰国してしまう。協力隊の活動は、同じところへ派遣されれば、リレーしながらやっていく。

点を面にしていく

- ・大勢の隊員が同時に派遣されている国もある。一人の隊員は点であり、30カ国の国へ点・点・点と世界中にばらまかれている。これで幼児教育の支援とっていいのか。その点・点と行く人たちの活動は一体どうなのだろうか。しかし、2代続ければ4年間の線になり、5代続けば10年という線になる。さらに何箇所も行けば、それは面になって、始め点であったものも、日本の幼児教育っていいものはいいものである・私たちがやりたい、と途上国の人々に思ってもらえるようになる。
- ・10年のスパンがあれば、日本の幼児教育のほんの少しの部分であるけれども、例えば子どもに接する先生の態度であるとか、識字教育はただ詰め込みではなくやり方を工夫することができるなど、現場での具体的な面で貢献するところがあると感じる。政策的なものとはまた別にして、保育者の心として伝えていきたい。

- ・レジュメの3番目に、『幼児教育で向き合う課題』と書いたが、協力隊の個人個人、隊員が向き合った問題ということ、列挙した。言葉の壁・文化宗教の壁に対応しながら、自分の想いを伝えていく。
- ・指導者が腰を上げて日本に見学や研修に来るようになるまでに、やはり人と人との関係の中で、途上国の上層部との信頼関係ができなければやっていられない。指導者が腰を上げて「では、日本の幼児教育を見せていただきましょう」と言って来るようになると、やはり実際を見た人たちはどうしても目から鱗が落ちるのでは。そういったときに、本当に幼児教育が進んでいくということを感じる。大人中心の教育から子どもの発達に合った教育をと隊員が口をすっぱくして途上国の大人に向かって言っても、理解されない。しかし、日本に来て実際の姿を見れば、よく分かる。それを持ち帰ってもらえれば、隊員が耕した畑の上に素晴らしい木が育つだろう。
- ・子どもの自立を育てる、ということは日本では大事なこと。しかし、途上国に行くと、先生たちの自立をまず育てる、そちらの方向へいかなければならないと思う。幼児教育は教育分野では最後にとり残されながら、先生達が自分の力でやっていかなければならないんだということが分かってもらえれば、非常に嬉しい。

拠点システム事業への期待

- ・指導者の養成ということで、拠点には非常に期待している。協力隊だけではできないこと、それを是非お願いしたい。
- ・隊員の後、シニア海外ボランティアという、相当にエキスパートの人たちが途上国に派遣され更に指導する。このような方々へ情報提供や技術を、是非拠点でお願いしたい。

幼児教育ネットワーク

- ・協力隊幼児教育分野のOB会。拠点でメンバーに加わるまでの背景には、このネットワーク組織がある。ネットワークによって情報を集め協力して実績をつくり上げてきた。